

意志決定と専門家の役割

災害あるいは事故の現場での専門家による状況の分析とこれに基づく判断が事態への対処にあたり重要な役割を果たし、被害の拡大防止やその最小化に貢献しています。

中越地震による斜面崩壊の現場で土砂の中に閉じこめられた方の救出にあたって、砂防の専門家が現地での危険度の判定で担った責任と役割は、後日多くの方の知るところとなりました。1999年のJIO臨界事故の避難と避難解除、2000年有珠山噴火の約1万人の緊急避難とその後の一時帰宅、三宅島の全島避難等々災害や事故の現場において、専門家が状況を分析し判断を行い、これを踏まえた現地本部長や市町村長等の意志決定と指揮により事態への対処を可能にしてきたと考えています。こうした場面における対処は、専門家抜きでは成り立たないのではないのでしょうか。

一方で、緊急事態への対処等の評価と異なり、平常時では専門家に対して、必ずしも評価がなされず、自らの専門の狭い範囲での判断であるとか、専門家グループのために行動するのではといった評価を受ける場合すらあるように感じられます。

専門家とは「特定の職域に精通し専門的な知識

と能力のある人のこと」という定義もありますが、ここでは定義には踏み込まずに、社会で一般的に使われている意味合いとして進めます。専門家への評価が、平常時と危機管理の場面とで違うとすれば、その理由はどこにあるのか、気になります。ひとついえるとすれば、緊急事態対処にあたっては、平常時と異なり共通の目的が明確に存在し、目的と手段の関係も明確で、かつ多くの人に共有化されています。また、意志決定にあたり、時間が極めて限られていること、意志決定と責任との関係が直接的であることでしょうか。平常時であればさまざまな観点からなされる数多くのチェック等の確認の事項が限定的で少なくなり、事案に直接関わる専門家の役割と責任が相対的に大きくなるがあると思います。災害現場での無人化施工に必要な許可が出るのに通常何ヵ月もかかるような事項が数時間でOKになるなどの例が特徴的であります。

これまで直接関わった危機管理の現場のなかで、専門家の役割に関して忘れられないのは1999年茨城県で起きた東海村JCO臨界事故です。この臨界を止めるための水抜き作戦の中心になられた原子

国土交通省 大臣官房 技術審議官

せき
関

かつ み
克 己



力の専門家の先生の話です。先生は、中性子は見えないから一層恐ろしい。だからこそ、まず原子力の専門家がデータ・情報に基づいた具体的な危険度に応じて恐れ、さらに、安全の程度に応じて安心するという、あたりまえのことから始めることが重要なのだとおっしゃってられました。

さらに、JCOの臨界事故への対処にあたり、まだ臨界が完全に収束しないなか、少しでも早く地域の避難されている住民の方々が帰宅できるよう、臨界事故現場の建物の周辺に土嚢を積むのにあたり、多くの関係者が躊躇するなかで作業を担い評価されたのは、やはり危険の程度と安全の程度を理解していた原子力の専門家でもある、全国から駆けつけた電力会社の方々でした。

現在、さまざまな社会のシステムや建設生産に関わるシステムの改革等多くの取り組みが進められています。こうしたシステムをより機能的で合理的なものにしていくために、意志決定と専門家の役割という視点を明確に位置づけ、平常時の枠組みのなかでの検討とともに、緊急事態への対処のような動的な場面を加えていくことが必要と考えております。

また、先ほどのJCOの場面でもう一つ忘れられないのが、土木は羨ましいとおっしゃったことです。原子力等と比べて土木は多くの分野が関わりずそ野が広く、また、現場の熟練した技能から最先端の技術まで非常に幅の広い技術と専門家を組み合わせ仕事をしている総合的な安定した技術だとおっしゃったことです。これは一方で、多くの分野が関わるために意志決定が困難ということでもあります。さらに、社会的価値観の変化や技術開発の進展により建設生産システムの川上から川下までの意志決定に関わる役割分担が大きく変化しています。国土管理や建設生産等のシステムにおいて専門家の果たす役割が大ききことから、現在抱える多くの課題をブレイクスルーするために意志決定と専門家の役割の再構築が必要と考えております。